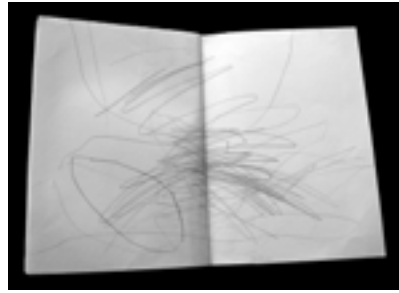




母親が製本する



幼児の線遊び

一 誰でも簡単に楽しく作ることができる絵本

このブックレットは、「子どもと一緒に絵本を作りたいけど難しそう」とか「絵を描くのが下手だから自分には作れそうもない」と諦めている人に、または、「絵本作りに強い関心をもっているけど、何からはじめたらよいかわからない」という人に手作り絵本の楽しさを伝えたいと思って書きました。

二・三歳の幼児が何を描いたかわからないぐちゃぐちゃの絵を数枚集め、子どものものつづやきを大人が聞いて書き入れ、糊づけすると絵本になります。子どもの貴重な成長記録を残すことができます。右の図は二歳六ヶ月になる女の子がわたしの目の前で描いて見せてくれた線遊びです。この子は線のかたまりを指差して「ぞうさん」、「アンパンマン」と教えてくれました。あとでこの女の子のお母さんがつづやきを書き入れ製本したものが左の図です。

また、小学校や中学校で学習したことや観察記録、遠足の思い出、創作した物語を絵本にして長く保存することができます。

さらに、高齢の方は自分史を絵と文で綴って製本すると、世界に一冊しかない立派な「手作り自叙伝絵本」ができてあがりります。

手作り絵本を作る目的は人によって異なります。

・自分が楽しむため

・自分が大事にしているものを残すため

・身近な人（友だち・子ども・孫など）に見せたり贈ったりするため

など、同じ人でも作る度に目的が変わってくることもあります。

プロの絵本作家になるためではなく、初心者の方が少しでも多く関心をもって短時間でできる手作り絵本に取り組んでほしいと願っています。そこで、材料や道具は手元にあるものや、手軽に手に入れることができるものを使います。また、けがをしたりまわりを汚したりしないように気をつける方法を書いています。

絵をさきき、ストーリーはあとで考える

絵本を作ろうと意気込んで、はじめに物語を考えるとなかなか前に進むことができません。慣れていない時は絵を先に、ストーリーはあとで考える方が作りやすいです。

まず、手を自由に動かし、くるくる回して線遊びをしてみましょう。気楽に偶然引いた線の中からイメージをふくらませ連想すると、ラフスケッチの中から思いがけないおもしろい絵本になることもあります。

わたしの授業で、いままで絵本を作ったことがない学生たちがはじめにするこ

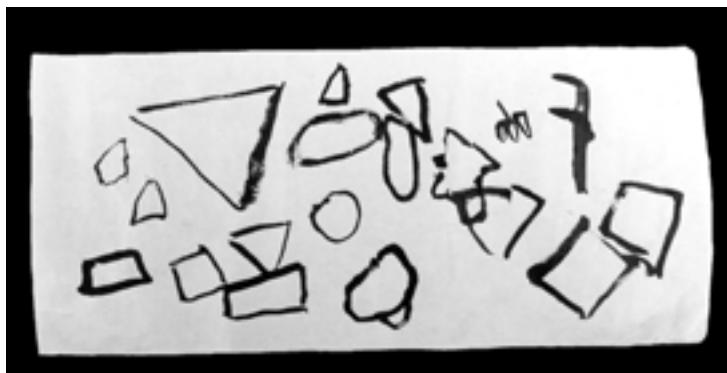
とは百円シヨップで売っているような薄手の八つ切り画用紙を半分につけて、幼児になったつもりで画面に無作為にぐちゃぐちゃな線をなぐり描きします。線を描くのは色鉛筆でもカラーサインペンでもいいですが、クレパスは色移りするので使わないでください。もし、使うのであれば、画材屋でフィクサチーフスプレーを買ってきて画面に吹きつけると色移りを防げます。

つぎに学生たちは童心にかえり、自由に四枚ほど描きなぐったあとで、描いた順とはちがう順に並べ替え、ぐちゃぐちゃ線からイメージをふくらませて短い文を書き加えます。時には色紙や新聞紙のカラーページをちぎって画面に貼りつけます。これを内折にして糊づけし、表紙をつけると簡単な絵本になります（作り方については「五・ソフトカバーの絵本を作る」で詳しく説明します）。

まずはじめは、肩の力を抜いて幼児の気持ちで「ぐちゃぐちゃ線の絵本」を作ってみると、つぎからは「こんな絵本を作ってみた」というイメージを育むことができます。裏側が印刷していないカレンダーやポスター、広告紙などを再利用して白い画面に線を描くことから始めてください。

絵を描くなら線を生かす（○△□）

つぎに主人公を決めます。絵本の主人公は写真のように写実的に描く必要はありません。絵本に登場するものは生き生きと動いている感じであらわすことが



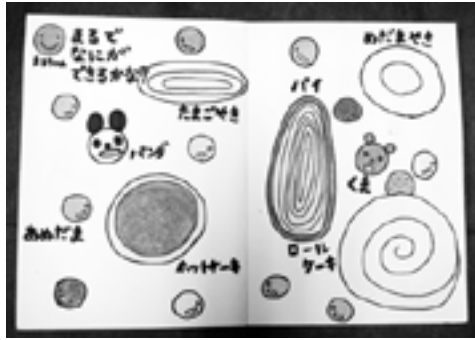
幼児が描いた○△□

だいじです。そのためには毛筆の線を生かすと効果的です。消すことができない毛筆の線で絵を描くなど無謀なことといわれますが、緊張して集中して描くと思いがけない生命力のあふれた絵になります。毛筆の面白さは「四・折れ本型絵本を作る」で紹介します。詳しいことは拙著『毛筆のよさを生かす美術教育』（明治図書出版）をご参照ください。毛筆の線で描くといままで知らなかった自分の表現力を発見することができます。

幼い子どもが描く絵は、かたちのバランスがとれていなくとも力強い線でぐいぐい思いきって描いているから、生きて動いている感じがします。大人も絵本の絵は、うまく描こうとするのではなく、線を生かして強調したいところは大胆にデフォルメをしてみるとおもしろいものになります。

ぐちゃぐちゃにながり描きをしていた幼児が意識して○△□を描くようになると、人間も動物も自分が興味をもつところの特徴をとらえて描くようになります。たとえば、「ぞうさん」を描く時、小さい○は頭、大きな○は胴体、胴体の下に□を四つ描くと足、耳は△、鼻は長くて細い□、というように、○△□を組み合わせているいろいろなものを思い浮かべて簡単に描くようになります。

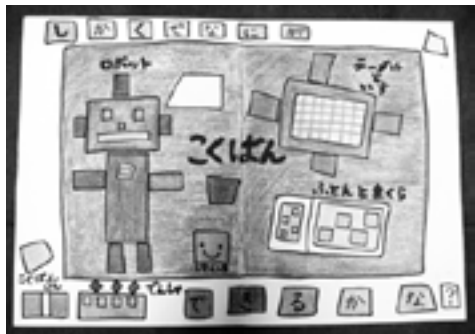
浮世絵で有名な葛飾北斎はいまから百数十年前、江戸時代末期に、誰で



○をもとに（『なにかができるかな?』より）



△をもとに（『なにかができるかな?』より）

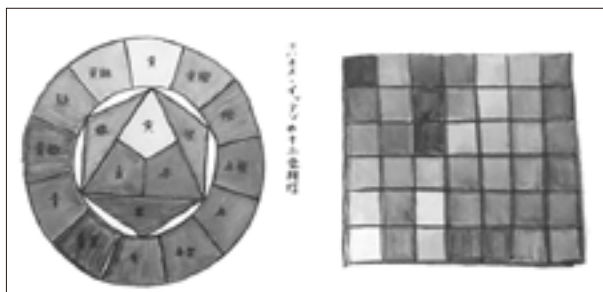


□をもとに（『なにかができるかな?』より）

も簡単に絵を描くことができるように、コンパスと定規（○△□）を組み合わせて描く手本『略画早指南』・『一筆画譜』などを出版しました。当時、大人も子どもも夢中になって模写をしたといわれています。

現在、書店で売っている『エンバリーおじさんの絵かきえほん』のシリーズ（偕成社）は北斎の考えに似て、絵を描くことが苦手な人でも○△□を組み合わせて簡単に描く方法を教えています。

学生が作った『なにかができるかな?』という絵本は、小さな子どもに○△□の



十二色相環

試し塗りの方眼紙

基本的なかたちで、さまざまなものを描くことができると気づかせることができます。

色を塗るなら赤・黄・青を混ぜる

線を生かしてかたちを描くと色塗りは簡単です。赤・黄・青の三色の絵具だけで百色どころか何千、何万色も無限に作り出すことができます。ただし、白と黒は作ることができません。黄に少しだけ赤を混ぜると人物の肌色になります。黄に青を混ぜると若葉から深緑の葉の色まで作ることがができます。白は何も塗らずに紙の地色を生かします。白の絵具を混ぜると線が鈍くなります。黒っぽい色がほしい時は青を多くして赤と黄を加えると、黒に似た暗い灰色になります。どうしても黒が塗りたい時は墨を使います。

このように赤・黄・青の絵具だけで混色すれば、ページをめくっていつでも色の調和がとれます。また、後片づけも簡単です。筆をよく洗って乾燥させるだけでパレットは洗わなくてすみます。パレットに残った絵具は乾燥しますが、水でぬらした筆で溶け出し、また使うことができますので無駄になりません。

上の図は、学生が赤・黄・青の三つの水彩絵具を混ぜて彩色した十二色相環と試し塗りをした方眼です（口絵三ページ参照）。この三原色の混色方法は、絵具を使い始める子どもに教えてほしいことです。絵本作りだけでなく、絵を描く

時にもデザインの学習にも役立つ混色の基礎知識です。十二色相環は、ドイツの総合造形学校バツハウスの教師、ヨハネス・イッテが学生に色彩の基礎知識をわかりやすく教えるために九十年ほど前に工夫したのですが、いまでも色の学習に役立ちます。

「鉛筆で描いた下絵はよかったのに色を塗ると失敗をよくした」という学生も、この三原色だけで千色も一万色も自分で作ることを理解して、絵を描くのが楽しくなったそうです。

二・身近なところに絵本の種を見つける

わたしのすきなもの

「幼児の造形表現」の授業は、幼稚園教諭や保育士の免許を取得したい学生や、幼児教育や絵本に関心をもっている学生が受講します。毎年、一月から二月にかけて学生たちは自分たちで作った絵本を多くの人に見ていただくために、構内にある教育資料館で『みんなの手作り絵本展』を企画運営します。教育実習に行く前の学生が多く、地域の人たちや子どもたちに簡単な絵本作りを伝える工夫をします。

手作り絵本展の会場で、誰でも自由に参加して手作り絵本を作る時に、初対